

I P M実践指標モデル（キャベツ）

管理項目		管理ポイント		チェック欄
		取組内容	メモ	
予防	健全種子の確保	1) 消毒されている種子を使用する。消毒されていない種子は粉衣等の処理を行う。		
	適正な品種の選定	2) 萎黄病抵抗性品種を選択する。また、根こぶ病やパーティシリウム萎凋病の発生圃場では、作型と品質を考慮しながら抵抗性を持つ品種を選択する。		
	健全苗の育成	3) 前作で病害・雑草が多発した育苗圃場は避ける。セル成型苗育苗では、市販育苗土など病原菌による汚染がなく、雑草種子の混入していない用土を用いる。自作培土や地床育苗では、土壌消毒を行う。		
		4) 品種の特性に応じて、適正な播種量、施肥量等を守り、病害が発生した場合は速やかに処分する。		
		5) 育苗中は過度の灌水を避けるなど、高温多湿にならないようにする。		
		6) アルミ蒸着テープ等の反射資材の利用、黄色蛍光灯の利用により、害虫の発生を抑制する。		
		7) 防虫網、不織布資材を用いて、チョウ目の害虫の産卵を抑制する。	【ネットの目合い】 コナガ：0.8mm、リン翅目：4mm	
	栽培圃場周辺での雑草管理	8) 圃場内への雑草種子の持ち込みや雑草を発生源とする害虫の侵入を抑制するため、畔等の雑草防除に努める。		
	圃場の選択と改善	9) 排水の良い圃場を選択し、低湿地の圃場での作付けは避ける。圃場では排水対策を行う。		
		10) 田畑転換を行う。		
	夏期の圃場湛水（菌核病対策）	11) 夏期に圃場を入水代掻きして2週間以上湛水状態にする。	湛水は菌核病菌の菌核を死滅させる効果があり、地温が20℃以上で効果が得られる。	
	土壌pHの矯正（根こぶ病対策）	12) 土壌pHを測定し、pHが低い場合には、石灰質資材等を施用して土壌pHを矯正する。		
		13) 転炉スラグを施用する。		
	施肥	14) 土壌診断を受け、その結果を基にして適正な施肥を行い、3要素（窒素、リン酸、カリ）の過剰施肥を避ける。		
	雑草の管理	15) 前作及び圃場での雑草の発生状況、草種等を確認し、適切な除草剤を選択する。		
		16) 株元灌水を行うなどしてスムーズに苗を活着させ、外葉が早く地表面を覆うようにする。		
		17) 中耕や培土は、定植後～キャベツの外葉が大きくなるまでの間、雑草の小さい時期に行う。キャベツより草丈が高くなる雑草は、早めに手取り除草する。		
	性フェロモン剤の利用	18) 集団化している圃場では、地域全体で性フェロモン剤を処理し、交信攪乱による地域全体の害虫の発生密度抑制を図る。		
	定植	19) 品種に応じた適正な栽植密度とする。		
	圃場衛生	20) 発病株は、発見次第、早めに抜き取って圃場外に持ち出し、適切に処分する。		
		21) 根こぶ病等の土壌伝染性病害の発生圃場からの汚染土壌の拡散を防ぐ。	耕作機械に付着した土を落とす。	
		22) 細菌病の発生を抑制するため、降雨直後の管理作業は避ける。		
		23) 同一圃場でのアブラナ科野菜の連作は避け、輪作を行う。輪作作物としておとり植物等を利用し、土壌病害の密度を低下させる作物を栽培する。	根こぶ病抵抗性葉ダイコン等のおとり植物は、根こぶ病に効果的である。	
	収穫後残渣の処理	24) 天地返しなどで、菌核を土中深くに埋め込む。		
		25) 収穫後の残渣は病害虫の発生源となるため、早めに処分する。		

I P M実践指標モデル（キャベツ）

管理項目		管理ポイント		チェック欄
		取組内容	メモ	
判断	病虫害発生予察情報の確認	26) 病虫害防除所が発表する発生予察情報等を入手し、確認する。また、フェロモントラップ等を用いて地域で予察を行っている場合には、その情報を入手する。	病虫害防除所のホームページアドレス http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo	
	防除の要否の判断	27) 圃場内を見回り、病虫害の発生や被害を把握するとともに、気象予報等を考慮して防除の要否を判断する。		
	防除の要否の判断	28) 根こぶ病を対象に、土壌中の菌密度の推定値、土壌診断値から発病リスクを推定し、それに基づき防除方法を判断する。	土壌中の菌密度の測定は民間企業の根こぶ病診断サービスの利用ができる。 発病リスクの推定はオンラインの土壌病害診断サービス等の利用ができる。	
	土着天敵の確認	29) 栽培期間中に最低1回は当該圃場もしくは周辺に生息している土着天敵類の発生状況を確認する。	土着天敵類としては、ヒラタアブ類、アブラバチ類、クモ類、ゴミムシ類などが挙げられる。 クモ類、ゴミムシ類の調査方法として「農業に有用な生物多様性の指標生物調査・評価マニュアル」 http://www.niaes.affrc.go.jp/techdoc/shihyo/ が参考になる。	
防除	播種～定植の農薬施用	30) 播種から定植時に農薬を施用し、少量の薬剤でその後の病虫害の発生を有効に抑制する。	育苗トレイ灌注処理を行う。	
	天敵への影響が少ない農薬の利用（チョウ目害虫対策）	31) 微生物農薬など天敵への影響が少ない農薬を使用する。	農薬の天敵への影響については、日本バイオロジカルコントロール協議会のホームページ（ http://www.biocontrol.jp/ ）等を参考にする。 微生物農薬にはBT水和剤、ボーベリア・パシアーナ剤等がある。	
	農薬の使用全般	32) 対象病虫害・雑草に応じた薬剤の選定を行う。		
		33) 十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討したうえで、使用量および散布方法を決定する。		
		34) 農薬を使用する場合は、特定の成分のみを繰り返し使用しない。	FRACコードが同一のものは作用点が同じなので、連用を避ける。	
その他	作業日誌	36) 各農作業の実施日、病虫害・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のI P Mに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	ドリフト低減ノズルの使用や、風向きに注意して散布するなど飛散防止に努める。	
	I P M研修会等への参加	37) 県や農業協同組合等が開催するI P M研修会等に参加する。		